

2004 年 10 月 1 日

原子力委員会  
委員長 近藤駿介様

「もんじゅ」を廃炉に！全国署名運動  
原子力資料情報室  
原水爆禁止日本国民会議  
原子力発電に反対する福井県民会議  
ストップ・ザ・もんじゅ

## 「もんじゅ」の廃炉を求める 要望書

私たちが 2000 年 6 月にこの「もんじゅ」の廃炉を求める全国署名を立ち上げた発端は、95 年 12 月の「もんじゅ」ナトリウム火災事故でした。「たいした事故ではない」と推進側の大方が受け止めたことと対照的に、福井、福島、新潟の三県知事はその「提言」(96 年)の中で「安全性の根幹に関わる重大事故」と位置づけ、私たちも原発立地県の知事の見識に共感しました。事故で明らかとなったナトリウムの腐食メカニズムを「知見も問題意識もなかった」と原子力安全委員会も率直に認め、これだけでも「もんじゅ」の安全性は再審査されるべきでした。

しかし国は「もんじゅ」の安全性を一から見直すこともせず、推進側の専門家は「あの程度のことで中断させてはならない」とのおごり高ぶった姿勢をとり続けました。

一方、2000 年 6 月に国から出された新原子力長期計画では、驚いたことに、それまでとはうって変わって「もんじゅ」の次の実証炉計画も実用化の目処も完全に霧散し、いったい何のために「もんじゅ」を続けるのが全く釈然としないまま、ともかく「原型炉」と位置づけて「早期運転再開」だけがうたわれていました。

国が何が何でも「ありき」で一度決めた路線を変えないという姿勢に終始する一方で、採算が見込めないことを理由に新型転換炉の実証炉計画を拒否した電力会社が、この時すでに高速増殖炉においても「もんじゅ」の次を引き継ぐ気が全くないと言われていました。新長計はこうした事情を反映していたのでしょう。

2001 年 6 月 5 日、77 万に達した「もんじゅ」廃炉要求署名の第一次提出の際に、直接お目にかかった福田官房長官が「もんじゅ計画は失敗で

した」と言われたのは、こうした諸々の状況を踏まえれば当然の認識であつたといえましょう。「もんじゅ」計画はあまりに拙速で、国も過剰な期待を寄せすぎたのです。

2003 年 1 月、名古屋高裁金沢支部は原告住民側の主張を全面的に認めて、国の「もんじゅ」に対する設置許可の無効を言い渡しました。国の安全審査の重大な不備が 3 点指摘されましたが、判決文全面に渡って安全性の拠り所であるはずの原子力安全委員会の安全審査のずさんさに対する驚きと憤りが伝わってきます。原告住民のみならず多くの国民、市民が司法の裁きに喝采を送りました。政治にとってはこの司法の判断を真摯に受け止め、破綻したプロジェクトの歪みを是正するまたとない機会でした。

しかし国側は即座に最高裁に上告受理申立を行うと同時に、最高裁の判断を待つ姿勢すらかなぐり捨てて、「もんじゅ」の運転再開ありきで改造工事着工を強引に進めようと計りました。当然のことながら福井県民始め全国の市民の反対にあい、この目論見は頓挫したままです。

藤家洋一前委員長は、「もんじゅ」の先行きも実用化の目処も立たない行き詰まった状況の中で「100 年先のことを考えて」と苦し紛れに言われました。これ以上、公的資金を投じて開発を続ける合理的理由は何もありません。原子力長期計画の改訂作業が始められた今こそ、「もんじゅ」計画は失敗だったことを直視して、これ以上、多額の税金を浪費し続けることのないよう、また、国民、市民の生命を危険にさらすことのないよう、事業の中止、すなわち「もんじゅ」の廃炉を決断されることをここに強く求めます。

以上